

「一心千里」

走って見れば、見えてくる

永田 隆一



第81回

今回は、当社の最高顧問 永田幸治が7年前に電子デバイス産業新聞の姉妹誌『環境エネルギー産業情報』へ寄稿した文であります。昨年、86歳で天寿を全うできました。

運輸省の3人の局長が「天下りはしたくない。これからは迅速に動ける民間のコンサルティング会社が必要になる」と、JPC日本港湾コンサルタントの旗揚げをした。私は34歳で袴かみしもを脱いだ。初めて東京へ出張をした時、私は靖国神社を参拝した。私の父、森太郎が祀られている神

インドネシア政府が日本からの円借款をベースにスマラン港の整備プロジェクトを発表した。鮫島会長は厳しい目をしながら微笑み「永田君、男として悔いのない、生涯に残る大仕事をやって来い。何かあれば俺に言え」と送り出してくれた。強力な競争相手が落札

にすっかりと仕事をこなした。このインドネシアに4年駐在できた体験は、私にとっては「かけがえのない人生の宝」になった。

その後、タイのソククラ港、ナイジェリア、中東と転戦を展開した。JPCの取締役を仰せつかり、長崎県上五島の洋上備蓄のプロジェクトを任された。

幸運の女神が微笑んでくれた

その時は「身の丈を忘れる」

昭和4(1929)年1月2日、私は廣島江田島で生を受けた。子供のころから私の周りには海があり、子供心に「将来、私はきつと海に関係をした仕事をしたいのだらう」と漠然と考えていた。

昭和24(1949)年4月、21歳のときに運輸省(現国土交通省)へ入省した。長崎県北松港工

社だからであった。涙が出て、涙が出て、仕方なかったことだけを鮮明に覚えている。

の筆頭候補であり、JPCは敵わないだろうとの下馬評であった。しかし、勝負事は下駄を履くまで分らない。今思えば、きつと幸運の女神が微笑んでくれたのであろう。

「洋上備蓄」とは、エンジンの付いていない巨大船(長さ390m、幅97m、深さ28m)を造り、それを過去の自然災害を丹念にレビューして、十分な安全率をかけて設計して、港につないで備蓄するのである。その船を5隻並べて、合計440万klという途方もない石油を備蓄するのである。しかし、この量は日本で消費する石油の6日分にしか満たない。

世界に類を見ない洋上備蓄のプロジェクトで4年、上五島町に拠点を構え、最後のご奉公を成し遂げて、70歳で退職した。

《偶然の出会い》

私は、人生とは偶然の積み重ねであると思う。出会って行くしてなどと言われる方もおられるが、それは後で理由をつけたようにしか、どこまでも思えない。

《男子一生の仕事》 JPCは、日本の高度経済成長の波に乗り成長を続けた。「人間は仕事を通して成長する」という言葉があるが、まさにそれを実践したように思う。

私はプロジェクトマネジャーとして、総勢15人のメンバーとともに丁寧

今考えてみると、仕事とは、日々の仕事を丁寧になすこと。これが重要である。そして時として、幸運の女神が微笑んでくれて、大きな仕事を与えてくれることがある。その時は「身の丈を忘れること」、いまだ誰もこなしなかったことがない。ひるんではいけない、挑むことが肝要だ。廣島の海の側で生を受け、運輸省港湾局、JPCという海を舞台に働くことができた。今、神楽坂でアンカー(碇)・ビジネス・システムズという会社へ入社している。もちろん偶然の賜物ではあるが、人生なかなか楽しいものじゃないか、と思ったりもする。

《毎月連載》

私は16歳で父を戦争で失った。昭和4(1929)年1月2日、私は廣島江田島で生を受けた。子供のころから私の周りには海があり、子供心に「将来、私はきつと海に関係をした仕事をしたいのだらう」と漠然と考えていた。

《毎月連載》

丸(6776)、310